

STAGE 2

文学的文章Ⅰ

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたし（さくら）と梨利はいつも行動を共にしてきたが、ある時、わたしが梨利を裏切ってしまった、二人の関係は閉じてしまった。そんな中、わたしが心の支えにしていた年上の智さんまでも、現実逃避し、地球を脱するための宇宙船のことばかりを考えるようになる。この状況を見かねた勝田くんが、自ら古文書をつくり、発見したかのようにわたしと智さんに伝える。そして、そこに書かれた一九九八年最後の満月の夜、智さんが突然姿を消してしまう。

一九九八年 最後の満月の夜

水城小学校の屋上に

真の友 四人が集いし その時

月の船 舞い降り 人類を救う

すると人類は もう宇宙船を造らなくてよくなるであろう

水城小学校は、たしかにあたしたちのもと母校だ。けれどあたしたちはたった一年間しかあの学校に通っていない。あたしたちが小学二年生にあがった春、水城小学校は生徒の激減と校舎の老朽化にともない廃校となったのだ。その後、再編成された学区に従ってあたしはニュータウンの新町小学校へ、梨利と勝田くんはとなり町の竹中第一小学校へふりわけられていった。

役目を終えた水城小学校は、噂だと、その一帯に造られる予定だった巨大なレジャーランドへ吸収される運命だったらしい。ところが、まだ解体工事も始まらないうちにバブルが崩壊。そのまま計画は無期延期となって、水城小学校はいまだに老いぼれた姿をさらしているわけだ。

街外れの暗がりには眠る朽ちた校舎。野菜畑や雑木林の広がる周辺には、その眠りをさまたげる人影もない。

たしかに、月の船を迎えるにはちょうどいい環境と言えるかもしれない。

でももちろん、それは本当に月の船が下りてくればの話で……。

「勝田くん！」

ひたすらペダルをこぐ勝田くんのうしろで、あたしは、大変こまったことを思いだしてしまった。

「月の船、どうするの？」

「え」

「月の船なんか来ないのに、どうするの？」

勝田くんはスピードをゆるめずに「しよがないよ」と笑った。

「しよがない？」

「だって、来ないもんは来ないんだから」

「そんな無責任な……」

「あのさ、オレ、智さんは月の船が来なくても傷つかない気がするんだよ」

突風に傾いた車輪のバランスを立てなおしながら、勝田くんは懸命に前へ、前へとつきすすんでいく。

「智さんだってあんな古文書、最初からぜんぜん信じてなかったし、今だって、たとえ水城小にいても、ほんとに月の船が来るなんて思っちゃいないと思うよ。でもきつとほかに、行くあてがないんだよ。ノートめちゃくちゃにして、宇宙船ぶっ壊して、これからどうすりゃいいのかわからないってときに偶然、あの紙を見つけたんじゃないのかな。だから月の船が来なくたって傷つかない」

だけど、と勝田くんは言った。

「だけどオレたちが行かなかつたら、たぶん智さんは傷つくんだ」

びゅう、とひととき激しい風に再び車輪がぐらついた。

あたしは古文書の予言を思いだして、そういえば……とつぶやいた。

「真の友が集まるとか書いてあったっけ」

「そ。真の友四人が集いしそのとき……」

「あ」

「あ」

勝田くんがブレーキをかけた。車輪がつんのめるようにして止まり、今度こそ地面に投げだされた。イタ、と腰を押さえたあたしの横で、しりもちをついたまま勝田くんは言った。

「やべ。ひとり足んない」

五分後、あたしたちは街角の電話ボックスにいた。大通りから外れた近道を行っていたため、公衆電話を探すのもひと苦労だった。

「ね、どうしても四人じゃなきゃいけないの？ 三人じゃだめ？」

受話器に手を伸ばす勝田くんに、あたしはしつこく食いさがってみたけど、
「だめ。四人って書いたんだから、絶対、四人だよ」

と、² 勝田くんはゆずらなかつた。

「でも、どっちみち月の船は来ないんだし」

「だからキーワードは『月の船』じゃなくって『真の友四人』なんだって。それにあの古文書はもともと智さんのためだけに作ったわけじゃないんだから。」

さくらと梨利のためでもあるし、ひいてはオレのためでもある。やっぱ四人じゃなきゃ意味ねえよ」

怒ったように言うなり、勝田くんは梨利の家の番号を押した。

思ったとおり、³ 梨利の反応はにぶかつた。例の事件以来、学校にも登校せず、勝田くんの面会も拒否している梨利が、そんなに簡単に呼びだしに応じるわけがない。「大事な話なんです」「人の……いや、人類の未来がかかっているんだ」

「など」と勝田くんがおばさんに熱弁をふるい、なんとか梨利を電話口までつれてきてもらったまではいいものの、人類の未来がかかっているはずの勝田くんの話は、梨利の耳にはさうとう荒唐無稽なものに響いたはずだ。

「たのむ！ どうしても四人必要なんだよ」

「水城小の屋上。おまえんちからなら近いだろ」

「だからその屋上に月の船が……」

「来ねえよ、月の船は来ねえけど、でもとにかくそういう予言なんだって」

「いや、ノストラダムスじゃなくって、勝田尚純の予言なんだけど……」

力説されればされるほど、梨利はますます混乱していったはずだ。さっぱり要領を得ないままに時間だけが過ぎていき、勝田くんのとなりであたしはだん

だんじれてきた。

電話ボックスのガラス越しに見える満月。風が黒雲を運んでくる中で、あの青白い光はいつまで地球を照らしているんだろう？ 満月が消えたら智さんはがっかりして帰ってしまうかもしれない。今度こそ地球に絶望して、せっかくすてたかもしれない宇宙船の世界にもどってしまうかもしれない。

「ん、さくらもいるよ。一緒におまえのこと待ってるから。こんな機会でもなきゃおまえら一生、このままだぞ」

勝田くんの声も次第にいらだたていく。

「ああ、言われなくなつてわかつてるよ。どうせオレはおせっかいだよ。人のことばっかり気にしすぎてんだよ。でもな、オレから見やあまえたちみんな、自分のことばっかり気にしすぎてんだよ」

受話器にむけられたその言葉は、梨利だけじゃなく、あたしへの非難でもあったはずだ。たしかにそのとおりだと、胸にずんときた。

あたしはこれまで自分のことばかり気にしすぎていた。それもうんと小さな、どうでもいいところで。

「なあ、いいかげん仲なおりしろよ、ふたりともなにこだわつてんだか知んないけど」

月から見れば塵のようなこだわり。

「ほんつとにどっちも意地つぱりだよなあ。おまえら似た者どうしのいいコンビだよ、オレが保証する」

それくらい保証されなくても知っている。

「もうすぐ一九九九年も始まる。今こそみんなで手と手を取りあつて……」
ちがう。そんなにむずかしい言葉じゃない。ほんの少しの勇気さえ出せば、あたしはもっと簡単に梨利を求められるんだ。

「貸して」

⁴ あたしは勝田くんから受話器を取りあげ、耳にあてた。

「梨利」

低くささやくと、受話器のむこうですうつと息を吸い込む気配がした。

あたしも大きく息を吸い込んで、言った。

⁵ 「会いたい」

会いたい……。

その瞬間、露木さんの言うトランペットの音色みたいに、あたしの中でなにかがずかんと空までつきぬけた。やっと言えたその一言が心の迷いも淀みも吹き飛ばしてくれた。最初のひと声がだせた今なら、もうなんだって話せそうな気がする。梨利をまきぞえにしようとした一瞬の恐怖も、そのあとの後悔も自己嫌悪も、百パーセント自分が悪いとわかってながら、それでも心のどこかでひそかに梨利をうらんでいたことも。

全身全霊で求めた SOS。

ふりはらわれた右手の後遺症――。

「さくら、よく言った」

あたしが言葉を続ける前に、しかし、⁶ 勝田くんがawatadしく受話器を取りあげて言った。

「そういうことだ、梨利、水城小の屋上で待つてるぜ」

がちゃん、と梨利の返事を待たずに受話器をもとにもどす。

「行くぞ、さくら」

「OK」

あたしたちは勢いづいて再び自転車に飛び乗った。さらにスピードアップした勝田くんの運転で静かな街路をつきぬけていく。

まだ遠い彼方の水城小学校。月の船など現れないその屋上に、あたしたちはこのとき、いったいどんな奇跡を夢見ていたんだろう？

⁷ たぶんあたしたちはどんな夢も見えてはいなかった。

ただ、どこにでも転がっているごくありふれた現実を、ささやかな平和を、取りもどしたいだけだった。

(森 絵都「つきのふね」から、一部表記を改めたところがある。)

線 1 「大変こまったこと」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。 「 」

1 勝田くんは自分が作ったにもかかわらず、月の船が「来ないもんは来ない」と突然開き直ってしまい、それを信じている智さんを深く傷つけてしまうということ。

2 古文書に書いてある「月の船が来る」ことは、勝田くんが勝手に作ったことで、実際には来るはずもなく、智さんにどう説明したらいいか分からないということ。

3 月の船は「真の友四人が集いしそのとき」に現れるのであって、今の段階ではあたしと勝田くん、智さんの三人しかおらず、あと一人真の友が足りないということ。

4 智さんは、「月の船が来る」ことを本当は信じていないのだから、水城小学校にすることもはっきりと確信が持たず、このまま向かっていいのかわからないということ。

※(イ)

線 2 「勝田くんはゆずらなかった」とあるが、そのときの「勝田くん」の気持ちとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 古文書に書かれたこの機会を逃すと、さくらと梨利が関係を取り戻せなくなるという確信し、さくらにどうにかして謝らせたい。 「 」

2 真の友四人を集めなければいけないことを口実にして、一方的に拒否されている梨利との関係を何としても修復したい。

3 古文書をきっかけに、さくらと梨利を仲直りさせ、智さんを含めた四人の以前のような良い関係をどうしても取り戻したい。

4 古文書に月の船が来ると明らかでならめを書いてしまったので、真の友四人までそろわず全てがうそになることは避けたい。

※(ウ)

線 3 「梨利の反応はにぶかった」とあるが、梨利の気持ちの説明を、次の条件を満たし、全体で五十五字以上六十五字以内の一文で書きなさい。

書き出しの「梨利は、」という語句に続けて書き、文末は、

「と、いうこと。」で終わること。これらも全体の字数に入れること。

